

中学校・高等学校における古典文学教育の授業実践案

—— 比喩歌の創作体験の有効性と、今後の課題について ——

森 田 直 美

キーワード：中学校 高等学校 古典文学 教育法

要旨

現行の中学校、高等学校国語の学習指導要領では、「伝統的な言語文化に関する事項」が、重要視すべき項目として挙げられており、古典の世界に興味や関心を抱くことができるような授業方法の検討が、これまで以上に強く求められている。こうした現状を踏まえ、筆者は大学の授業において、「比喩の歌の創作」という試みを行った。

和歌初学者にとって、一首すべてを実作することは難易度が高いが、和歌の比喩の部分だけを考えると課題とすることで、多くの学生が意欲をもって臨むことができた。また、「一部だけを考える」という方法は、「本歌取り」のような和歌技巧の解説にも役立つ。そして、課題終了後のコメントには、和歌への興味の高まりや、古典学習への意欲を示すものが多く見られた。この興味・意欲の喚起は、現行指導要領が

強く求める事項であり、古典文学と学生の距離を縮め、とかく敬遠されがちな文法学習を乗り越えるための原動力ともなり得る点、「比喩歌の創作体験」課題の有効性が看取できる。さらに今後の課題として、和歌の実作という実践授業を、一過件のものではなく、学習者の発達に合わせて段階的・継続的に行う意義と、注意すべき点についても言及する。

はじめに

二〇一五年一〇月に開催された和歌文学会大会（於岡山大学）のシンポジウムテーマは、「和歌を学び、教えるということ」であった。同大会は、学会創立六十周年記念大会であり、和歌文学研究者たちにとって、例年にまして注目度の高い大会であった。その記念大会にふさわしいシンポジウムテーマは何かという試行錯誤を経て、選出されたのが「中

学・高校・大学における和歌教育」であった事実は、和歌文学の置かれている現状と強く結びついている。すなわち、時代の流れの中で淘汰されつつある文系学部の中でも、とりわけ衰退いちじるしい古典文学分野の将来に対する、研究者・教育者の危機意識の強さが察せられるのである。また、中学校、高等学校における国語の学習指導要領では、いずれも「伝統的な言語文化に関する事項」が、重要視すべき事項として挙げられており、古典の世界に興味や関心を抱くことができるといえる。そのような授業方法の検討が、これまで以上に強く求められている。

美

直 このような現状を受けて、多くの古典文学研究者たちが、自身の研究課題を突き詰める傍ら、古典文学を学ぶ面白さや意義を明確な目的意識（たとえば、思考力・精神性の育成というような）に沿って伝える役目を、ひとつの使命と捉え始めてもいる。前記の和歌文学大会に先立ち、高校生・大学生の和歌入門テキストとして同学会が企画した『和歌のルール』（注①）が刊行された。和歌文学にあまり馴染みのない

森

初学者への配慮を徹底し、解説文もやわらかく、馴染みやすい工夫が凝らされている。同書ほど親しみやすい指南書は前例がとぼしく、一人でも多くの方々に和歌に興味をもってもらいたいという狙い、願いが十分に示されている。

本稿は、このような古典文学界の問題意識や今後への展望

を受け、改めて、「初学者、入門者が和歌に馴染み、親しみを覚えながら、古典文学を学ぶための要点は何か」を考え、そのために有効な授業の方法を探ろうとするものである。具体的には、筆者が大学で実践した授業の例を紹介し、その目的や目標を示すとともに、実施以前と以後で古典文学に対する学生の見方・考え方・理解にどのような変化が生じたのかについて言及する。また、先行研究や、筆者自身の授業実践を踏まえて、今後さらに注意を加えるべき点や、展望についても述べたい。

現代学生と古典文学との「遠さ」

筆者は大学の授業において、ほぼ毎回、授業に対する感想や疑問、その日に習得した内容について記したコメントカードの提出を課題としている。その内容を概観して強く感じるのは、学生の古典文学に対する「遠さ」、「無縁さ」である。

例えば、全学科が受講対象となる共通教育科目や、一年生の受講生が多い日本文学史などの授業において、『万葉集』や『古今和歌集』の歌を講義した際、毎年導入の四月段階では、以下のようなコメントが目立つ。

・昔の人の教養の高さに驚いた。

- ・私などでは到底思いつかない表現だと感じた。
- ・昔の人の発想力はすごいなと思った。
- ・和歌を詠むのは大変なんだろうなと思った。
- ・昔の人のように和歌を作るのは絶対無理だと思った。

これらの感想から共通して感じ取れるのは、和歌というものを作れる人は、「遠い昔の、突出した教養や発想力を持ち合わせている人々」で、「自分たちには絶対無理な縁遠い世界」だと捉える傾向があることである。

確かに古代の歌人たちは、優れた和歌を詠むために、幼少期以降、家族や女房といった人々から教育を受け、日々の生活における贈答や、歌合・歌会といった実践を積み重ねる。つまり、和歌を読むことは生活すること、生きることと共にあった。そのような環境地盤は、むしろ現代にはない。自分から学びの場を求めなければ、あるいは学校で課題などを出されなければ、和歌（短歌）の実作を経験する機会はほぼ皆無だろう。よって、生徒・学生に限らず、現代の人々にとっても、和歌というものがどのような思考過程を経て詠みだされるものなのか、とにかく実感の沸きようがないのである。

しかし、学習者が古典の面白さや豊かさを感じ、興味を抱きつつ作品に向き合うことは、相応の苦勞をとまなう中学校、高等学校での古典文学学習や原文の内容理解を乗り越えるた

めの要点でもある。よって、やはりこの「遠さ」、「無縁さ」を少しでも解消し、古典文学に「親近感」をもつことができよう試みることは、非常に重要ではないだろうか（注②）。筆者はこのような観点から、授業時にいくつかの取り組みを実践してきた。ここからは、その取り組みの内容と成果の一例について述べてゆく。

比喩歌の創作過程体験

以下に、学習者と古典文学、ここでは特に和歌との距離感を縮め、学びの意欲を高めたいという目的のもと、筆者が行った授業例と、学生の反応や感想について、具体的に記す。

和歌への距離感を縮めるために有効な方法は、やはりその創作過程を経験させることだろう。一首を生み出していく発想の軌跡を、その一部分でも味わわせ、和歌を創作してきた歌人たちの頭の動きを追体験させてみたいと考えた。しかし、一度も和歌を作ったことのない学生に、『万葉集』や『古今集』の和歌を紹介しただけで一首の創作を課したのでは、前述した「私には絶対無理」という思いを強めさせかねない。そこで、いわゆる「比喩の歌」の「比喩」の部分をも自分なりに考えさせることを試みた。以下に、その事例を示す。

■ 科目：二〇一六年前期 日本文学史(1)の第三回授業

(学部一〜四年次が受講可能だが、受講者全体の80パー

セント程度が一年次生)

■ 授業内容：『万葉集』における大伴家持周辺女性の和歌を学ぶ

まず、右の授業において、笠女郎による次の歌を講義した。

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額つくことし

(万葉・巻四・六〇八)

美 直 田 森

現代語に訳すと「自分のことを思ってくれない人に思いを寄せるのは、大寺の餓鬼の後ろから額をつけて拝むようなものだ」となる。つまりこれは、笠女郎が、恋人である大伴家持に、「私を大切に思ってくれないあなたを恋い慕うのは、本来拝む対象になるはずもない餓鬼像を、しかも後ろから必死に拝むくらい、不毛で滑稽なことに感じられます」と、自虐的に恨みを伝えた歌である。しかし恨み歌といっても、その内実は、切実な恋の苦悩の訴えというよりは、日常的なやりとりの中での、恋人へのユーモラスな刺激・挑発くらいに捉えるべき歌だろう。

学生には以上のような情報を提示し、以下のような内容で

課題を提出させた。

■ 笠女郎は、自分と同等の愛情を向けてくれない相手に

恋することを、「餓鬼像を後から必死に拝むくらい」

馬鹿げたことと詠んだ。ではこの「〇〇なくらい」と

いう比喩の部分、つまり、「自分をそれほど想ってく

れない人を恋い慕うこと」と同じくらい無意味だと思

われる行動を、自分なりに考え、提出しなさい。

◇課題の提示は現代語でかまわない。

◇和歌の「五・七・五・七・七」は、ひとまず意識しなくてもよい。

◇単に無意味な行動というだけでなく、恋人に贈る歌の比喩という点を踏まえること。

◇笠女郎歌のもっているユーモラスな雰囲気も意識してほしい。

では以下に、この課題に対し、学生たちから呈された比喻を、フィードバックした際に教員が伝えたコメントを挟みつつ、数例挙げていく。まず、課題の要点をうまく掴んで発想された好例と評価したのが、以下の五例である。

①水を汲むのに、底のぬけたバケツを使い続けるくらい

- ② 消しゴムでボールペンの文字を必死で消すくらい
- ③ 風が強く吹く中でマッチに火をつけようとすらくらい
- ④ とても長いエスカレーターを逆走して登ろうとするくらい
- ⑤ 靴の上から必死に足を掻こうとするくらい

これらが、他の例に増して、比喩として優れていると評価できるポイントは、以下の三点である。

- 身体の動きを伴う必死さと、それに比例する徒労感・空虚感が感じられること。
- 行動として、ある程度の時間的持続性が出ていること（恋人を想い続けることは、瞬間的な仕業ではないため）。
- 必死さの中にも、やわらかな可笑しみ（ユーモア）があること。

なお、五例の中でも、特に⑤は軽妙さに優れ、「届きそうに届かない」、もどかしい雰囲気もかもし出している。前述のとおり、笠郎女歌は本気の恨み歌というよりも、和歌を媒介とした日常的な恋人同士のコミュニケーションという性質が強い。そのため、相手に重圧を与えず、可愛らしいユーモアで刺激する表現にとどめることは、非常に大事な要素である。しかも、「靴の上からかゆい足を掻く」という、実際に、

ついついやってしまいそうな行動であるため、人々の共感をおよぶこともできる。実際、今回の課題の最優秀作品はどれだと思いかと学生に投げかけたところ、⑤を推す声が多かった。課題終了後にも、複数の学生から、「靴の上から足を掻いてしまうというのが、イメージがわきやすく面白かった」、「思わず「あるある」と頷いてしまった」といったコメントが寄せられている。

では次に、評価できる要素はあるものの、やや惜しい点もあると評価した五例を挙げる。

- ⑥ 犬が自分のしつぽを追いかけてクルクル回っているくらい
- ⑦ 降ってくる雨をつかもうとあがくくらい
- ⑧ 一時的にはまっっているアプリに重課金するくらい
- ⑨ 働きアリの行く手を阻むくらい
- ⑩ 土砂降りの雨の中、穴の開いた傘をさしているくらい

以上の内、⑥は、身体行動の継続性やゴールの見えない無意味さがあり、ゆるやかな笑いや誘いが、行動主が「犬」であることが、恋人に贈る歌としてはやや惜しい。⑦は、考えた学生本人が、「相手の心がなかなかつかめないことを、どう頑張ってもつかめない雨にたとえてみた」と説明を付していたが、その通り、必死さや虚しさはよく表現されている。

自分なりの表現意図をもって創り出した良作に違いないのだが、笠郎女歌が必要としている諧謔が見られない。たとえば、心底恋人の不実に不満をもち、その心離れを責める閨恨詩的な設定であれば最上の評価ができるが、今回に関してはシチュエーションに合致させる意識が欲しかった。⑧は、非常に現代的要素が強く、今どきの学生に対して共感性やユーモアも示すが、虚しさの源が肉体や精神によるものではなく、金銭である点がもう一步と思われる。⑨は、「なぜそんな行動をするのか」と、不可解さを感じ取れるあたりに、笠郎女歌との共通点があるが、行動から生まれる徒労感や報われなさが乏しい。⑩は、恋人からぞんざいに扱われる悲しさは表現できるが、⑦と同様に、それが勝ちすぎて怨念がこもり、歌を贈られた男性の気持ちの後退しかねない。ユーモアを添える一工夫が欲しい。

そして最後に、もう少し和歌の内容を考えて、工夫を加える余地があると評価した五例を挙げる。

- ⑪ 既にも買った本を、忘れてもう一冊買ってしまうくらい
- ⑫ 当たらない宝くじを買うくらい
- ⑬ 意味もなく自動販売機のボタンをピツと押して遊ぶくらい
- ⑭ 歴史上の人物に本気で恋をするくらい

⑮ 自分のプライドを守るために他人を蹴落とすくらい

⑪、⑫、⑬は、確かに得るものがあまりなく、もの悲しさを感じてしまうような出来事ではあるが、行動そのものが淡白で必死さや真剣さが乏しい。⑭は、恋の虚しさの喩えとして、恋を使っている点が比喩表現として弱く、面白味に欠けてしまう。⑮は、教訓的な要素が前面に押し出され、恋歌の比喩としてはややふさわしくない。贈られた男性は、恋心を触発されるよりも、自己の生き方への反省を促されてしまいたい。

以上のように、それぞれ評価コメントを添えつつ、学生から提出された比喩の例を紹介していった。そしてさらに、今回授業内で好評であった⑤を利用し、学生同士意見を出し合って、「相思はぬ人を思ふは」に続く「五七七」調に整え、「笠郎女歌アレンジ版」の創作を促した。そして、出来上がったのが以下の歌である。

「相思はぬ人を思ふは厚き革の靴の上から足掻くことし」
 単なる「靴」ではなく、語数を整えるために考え出した「厚き革の」という形容が、かゆい足に届かないもどかしさをより強めることに成功している。『万葉集』所収歌を本歌とし

た、現代版比喩歌の完成である。他の比喩も、それぞれの発想を「五・七・七」に収められるよう工夫すれば、同様の比喩歌を作り上げることができるだろう。

当初学生に出した課題では、「五・七・七」はひとまず考えなくてよいとした。それは、語数の縛りから解放することによって、より発想に広がりが出るだろうという狙いによる。それが功を奏し、学生からは、教員の予想を上回る、多種多様、かつ意欲的な比喩が呈された。課題として提出する比喩の数はひとつ以上としたが、ほとんどの学生が、三点以上の比喩例を考え、提出した。このことから、学生の創作意欲がうまく引き出されたのではないかと感じる。また、寄せられた比喩の例を紹介した際にも、「他の人の考えた比喩も、「なるほどな」「うまいな」と、楽しく聞いた」という意見が多く寄せられ、非常に活気ある授業が展開できた。

比喩歌創作体験の効果

さて、以上のような「比喩歌創作体験」から学生が学びとれるのは、和歌を詠むことは、自分たちが思っていたほど「突出した才能や発想力」を必須とするわけではなく、「絶対無理」というほど手の届かない仕事でもないということである。いにしえの人々も、和歌の初学段階では、前代・当代の名

歌をお手本とし、それに倣い、発想や表現を摂取しつつアレンジを加えていくことからスタートを切る。その意味で、和歌は「使いまわしの文芸」という一面をもっている。そうして発想や表現が共有され、少しずつ変化しながら引き継がれていくのが、和歌がもつ大きな特徴のひとつだということも、授業ではあわせて説明している。

では、この授業の後に提出された学生のコメントカードの事例を以下に挙げる。

- ・ 歌の一部を自分なりに考えてみるのは、予想よりも楽しかった。
- ・ 何かに喩えて自分の感情を表現するのは、とても面白い方法だと思った。
- ・ 普段もののたとえを考える機会があまりないので、難しかったが、新鮮で面白かった。

以上のように、「比喩を考えるのは意外に面白かった」という感想は、この授業後、最も多く見られたコメントだった。この感想が社交辞令的な美辞麗句でないことは、学生が考え出した比喩の多種多様さや、御座なりではなく、かなり凝った比喩も多く見られたことから察せられる。そして、「難しければ面白い」という感情は、更なる学習意欲を喚起する

原動力ともなろう。事実、今後の和歌学習への前向きな意欲が感じられる、次のような感想も目立っていた。

・ 比喩の和歌がとても面白く、他の作品も見てみたいと思った。古典の作品をもっと知りたいと思ったのは初めてのことだ。

・ 自分の気持ちを何かに喩えたいことに共感し、『万葉集』の歌人たちに親近感がわいた。

美 直 田 森
また、通り一遍に和歌を提示し、現代語訳とあわせて解説するだけではなく、能動的に歌人たちの実作過程を追体験することで、和歌表現そのものに対する理解も深化している。次のコメントには、ただ和歌の意味を知っただけでは生まれ得ない、実感をともなった理解や感懐が表れている。

・ 目に見えない心を、目に見えるものや行動で表現するのが恋の比喩だと先生が解説していたが、自分で比喩を考えてみて、それが実感できた。

・ 人に気持ちを理解してもらうのは難しいことだが、こういった歌ならば感情を込めやすいと思った。

・ 比喩を用いることで、何をどの程度感じているのか具体的に表現でき、気持ちを詳しく伝えられるところが良い

と感じた。

・ 比喩の歌というものを今回初めて本格的に学んだが、他のみんなが考えた比喩を見て、作る人の性格や境遇も、分かりやすく表れるものなのではないかと思った。

以上のように、ほんの一部ではあっても、和歌の創作過程を体験する試みから生まれた効果は大きく、多様である。筆者は、大学の授業においてこれを実践したが、中学校や高等学校でも無理なく取り入れられる実践事例ではないだろうか。授業で実践していく上で、大切なのは、以下の三点である。

・ 初めにベースになる歌と、比喩という表現方法について分かりやすく解説すること

・ 比喩を考えるにあたって、自由度を高めすぎず、ある程度の方向性やポイントを明示すること

・ まずは、和歌の語数の縛り（五・七・五・七・七）にこだわらないよう指示すること

これらの要点を、授業内での指示や、プリント配付によってクリアできれば、比喩を考えること自体は、宿題として授業外時間の課題にもできる。提出された比喩の例も、コメン

トとともにプリントを作成して提供すれば、古典文学教育にかけられる時間が限られている中学校、高等学校でも授業時間をそれほど削り取る必要がない。事前・事後学習にうまく組み込むことで、生徒の興味や関心の喚起という効果が出せる可能性は、十分にあるだろう。その興味や好奇心は、とかく苦手意識を抱いてしまいやすい文法学習などへの拒否反応を軽減することに、少なからずつながっていくはずである。

今後の課題・展望

ここまで示してきたように、たとえ一部であっても和歌の創作過程を体験する課題が生み出す効果は大きく、多彩である。前に述べてきた効果を、今一度簡潔にまとめれば、具体的に以下の三点が挙げられる。

- (ア) 和歌文学への興味を深め、古代の歌人たちへの親近感を高めることができる
- (イ) (ア)を通して、もっと和歌を学んでみたいという意欲を引き出せる
- (ウ) 和歌表現の意味や意図について、表面的ではなく、実感をともなう理解を深めることができる

以上、(ア)～(ウ)は、授業内容を練っている当初から筆者が狙いとした点で、それが成果として学生のコメントから看取できた点、目的にかなう適切な課題設定ができたと考えている。そしてさらに、当初筆者側からは目論んでいなかった、以下のような感想も見られた。

- ・相手に正しく気持ちが伝わる比喩を考えるためには、色々な経験を重ねたり、ボキャブラリーを豊富にする必要があると感じた。

この学生が考えた通り、実際、ひとくちに恋の歌の比喩といっても、状況設定によって、求められる喩えはさまざま。たとえば、壬生忠岑が詠んだ次の古今集歌は、第三句「生ひ出でくる」までが、後半を導く序詞である。

春日の祭りにまかれりける時に、物見に出でたりける女のもとに家を訪ねてつかはせりける
春日野の雪間をわけて生ひ出でくる草のはつかに見えし
君はも(古今・恋一・四七八)

詞書から、この歌は、春日祭でわずかに姿を見掛けた女性に一目ぼれし、家を訪ねて贈ったものであることが分かる。

そして、前半の「春日野の雪間をわけて生ひ出でくる（春日野に溶け残った雪の間からほんの少し見える）」は、その女性を「はつかに（ほんの少しだけ）」垣間見た状況を喩えたものである。また、その意中の女性に対して、「あなたは、初春に地中から出てきたばかりの若草のように、初々しい印象の方でした」という想いを伝えるための比喩でもある。もし、この時垣間見たのが、妖艶な年上の女性であったならば、この比喩は適切ではないだろう。下手な比喩は、贈られた女性の不快感を買いかねない。

美 直 田 森
このように、「わずかに見かけた相手に一瞬で恋をしたこと」と、「相手の女性の若々しい美しさ」を「雪間の若草」に喩える例がある一方、次の恋歌の比喩には、まったく異なる状況や、相手との関係性が表現されている。

釣殿の皇女につかはしける 陽成院御製

筑波嶺の峰より落つるみなの川恋ぞつもりて淵となりぬ
る（後撰・恋三・七七七）

この歌は、陽成院が、幼なじみであった釣殿の皇女（綏子内親王）と結婚した際に贈ったものとされる。すなわち、幼いころから徐々に育んできた綏子への愛情を、筑波嶺の峰から少しづつ流れ落ちてくる男女川みなのがわが長い年月をかけて深い淵

を作り出していく様子に喩えているのである。前の忠岑の恋歌のように、瞬時に落ちるさわやかで若々しい初春の恋に照らし合わせると、まったく異なる陽成院と綏子の関係性が、前半部の比喩によって表現されていることが明瞭に感じ取れるだろう。長い時間をかけて深まる恋は、山河の自然景に重ね合わされ、穏やかな長久性すら表出している。まさに平安前期における出色の比喩歌と位置づけられるものである。

この二つの恋歌からも察せられるように、比喩の歌は、想定される場面や当事者たちの関係性を意識し、そのイメージにぴったりと合う喩えを探し出してこそ、会心の詠作につながる。その創作の力は、語彙を増やし、人の感情の機微に通じ、さまざまに見聞を広げるといったことで磨かれる感性や表現力に、間違いなく比例するのである。

さて、国語科教育において、語彙や日常体験の豊かさは、思考力や読解力、表現力を育成していくための要点のひとつである。比喩歌の創作体験を通して、「自分の気持ちや場面を正確に表現するためには、語彙や生活体験の豊富さが必要」という考えに至ることができた学生が見られたのは、この試みのさらなる可能性を感じさせる。また、この点は逆照射すれば、学習者の内面的成長に合わせて、少しずつ難易度や表現する内容を変えて実作を課すことが、教員側に求められるということでもある。

中島賢介氏は、小中高等学校において俳句の授業を行う際、実際児童や生徒に創作をさせている事例が多いことに注目し、以下のような提言をしている（注③）。

俳句一つとってみても、その句が深みや味わいを帯びてくるのは、まず就学前教育が幼稚園教育要領にある（表現しようとする）心情・意欲・態度が育ってくるかが重要であり、子どもの発達過程における成長とともに言葉のリズムから語彙や諸規則を習得し、推敲するまでの段階を一人でこなすことができるようになるまでには時間がかかる。それを数時間やるかやらないかのおざなりの授業ではまず子どもたちの学習意欲が中途半端で一過件のものになってしまう。子どもに心じて興味関心の度合いは当然異なるが、少なくとも発達過程を踏まえることでより継続的な指導が可能になるのではないか。そして、こうした指導が可能になれば、子どもたちが生き生きと俳句を詠み、生涯にわたって俳句に親しむための基盤作りが期待できる。

中島氏は、俳句の授業における実作という試みを、児童、生徒の発達段階に合わせて段階的・継続的に行うことの意義を説いた。これと同じことが、筆者が本稿で提案した和歌の

実作についても言える。

たとえば恋歌の比喩も、今回の笠郎女歌のような諧謔性ははらむものであれば、中学校などでも面白い比喩が期待できる。しかし、たとえば次の二つの百人一首歌のような恋歌の比喩部分を創作させるのであれば、高等学校以降の生徒向きだろう。

難波濁短き葦の節の間も逢はでこの世をすぐしてよとや
（百人一首・一九・伊勢）

由良の戸を渡る舟人楫を絶えゆくへも知れぬ恋の道かな
（百人一首・四八・曾祢好忠）

伊勢の歌は、現代語にすれば、「難波濁に生えている短い葦の一節のように短い時間でも、あなたに逢わずにこの世を生きてゆけとおっしゃるのですか」となる。つまり、「ほんのわずかな時間でも、あなたに逢いたい」と、切実な心情を恋人に訴えた歌である。この歌の特徴は、時間の短さを、葦の一節という距離の短さに、感覚を置きかえて表現した点にある。また、曾祢好忠の歌は、「ゆくえの分からない自分の恋」への不安を、「由良の戸を渡る舟人が楫を無くしてしまつたかのように」と喩えた。今おのれが味わっている途方もない憂い、しかし、不安だからといって何も出来ることがない

という無力感を、流れの早い河口で楫を無くしてしまった舟人の心情にことよせる。

筆者は、これら二首についても、大学の授業において、前述した笠原女歌と同様の手法で、「短き葦の節の間」のように短いもの、「由良の戸を渡る舟人が楫をなくす」ような不安な状況の部分の創作を課した。その際に学生から呈された比喩は、以下のようなものであった。

〈伊勢の歌の比喩〉

- 美 意外に短いさざやパンダの尻尾
直 原宿で見た女子高生の、驚くほど短いショートパンツ
森

〈曾祢好忠の歌の比喩〉

- コンビニで買ったアイスクリームが持つて帰るまでに溶けてしまうのではないかと不安感
- 味噌汁の中の豆腐が、口に運ぶまでに崩れてしまうのではないかと不安感

これらはいずれも、学生たちが生活の中で「意外にも短いもの」、「おのずと不安な気持ちになる場面」を考え、楽しみながら比喩表現を考え出した点は評価できる。しかし、伊勢や好忠の歌がもつ切迫感や寂寥たるさまを汲み取って比喩を

考えようというレベルまでは、到達させられなかったという反省点もある。

この二首の百人一首歌は、なかなか思うようにいかない恋に焦り、打ちひしがれる内容をもつ点で共通する。そのような心情を理解し、共感をもつてふさわしい比喩を考え出すためには、やはり相応の語彙力、人生体験、もしくは体験を補う想像力が必要となる。

実作は確かに、学習者の発達段階を意識しつつ行われてこそ、教育方法としての有効性が高まるだろう。以上のような点を一つひとつ意識しながら、和歌の実作という古典文学の教育方法を、中学校、高等学校において段階的に継続する方法について、今後も検討を続ける所存である。

(講師 日本文学)

〔注〕

- ① 渡部泰明編『和歌のルール』（笠間書院、二〇一四年）
- ② 古典文学への関心や親近感を、古典教育の要点とし、授業実践例の検討を行った先行研究は数多くある。近年の代表的な例としては、渡邊剛「古典に親しむ態度の育成を目指す国語科学習指導―『古典A』における小倉百人一首のポップ作りを通して―」（『日本語学』第三四号（特集・高等学校「古典A」で何を教えるか）、明治書院、二〇一五年七月）、宮越今日子「古典に親しむ中学校国語科授業の提案―和歌を教材とした授業実践―」

③ (『山形大学大学院教育実践研究科年報』第六号、二〇一五年二月)などが挙げられる。

中島賢介「発達過程に応じた俳句創作指導法の研究」(『北陸学院短期大学紀要』第四〇号、二〇〇八年三月)。

〔資料出典〕

- ・ 小学館「新編日本古典文学全集『万葉集』」
- ・ 『万葉集』以外の和歌の掲出は新編国歌大観CD-ROMによるが、読解の便宜上、一部私に表記を改めた。